

第2回アイヌ施策推進検討会 会議録

1 開催日時

令和6年8月2日（金）午後6時～午後8時15分

2 開催場所

旭川市民生活館 2階講堂（旭川市緑町15丁目）

3 出席者 ※敬称略，五十音順

（1）参加者

大野 剛志，川村 久恵，坪坂 ルミエ，矢三 尚

（2）事務局

社会教育部文化振興課 坂本課長，山脇補佐，小川

（3）オブザーバー

福祉保険部 尾藤主幹，田崎主査

社会教育部旭川市博物館 矢萩館長，友田副館長

4 会議の公開・非公開

公開

5 傍聴者

5名

6 議題

（1）前回開催時の参加者発言の概要（取組の御提案）

（2）次期アイヌ施策推進地域計画について

（3）令和7年度の実施事項について

7 発言内容

次第2「前回開催時の参加者発言の概要（取組の御提案）」に関する発言

□事務局

別紙1を基に概要を説明

（参加者からの発言 なし）

次第3「次期アイヌ施策推進地域計画について」に関する発言

□事務局

別紙1及び別紙2を基に概要を説明

■参加者

確認だが、別紙2の「4-1(5)アイヌ文化や生活に関する調査及び記録の作成」の最後の④の数字はどの資料に対応しているか。

□事務局

別紙1「前回開催時の参加者発言の概要」の番号に対応している。

■参加者

別紙3とリンクさせてイメージしているが、別紙2の「4-1(5)アイヌ文化や生活に関する調査及び記録の作成」について「記録して保存することによりアイヌ文化の伝承に役立つ」というのは、別紙3の3ページ目では、①の「文化の保存」のところになるのか。

□事務局

そのとおりだ。「保存」と②の「文化の伝承」にも入る。

■参加者

大きな柱の話になってくるが、別紙2の2ページ目に、前回の会議の委員の意見を反映して「市民の主体的活動の促進」「仕事の創出」が新しく設定された。前回の委員の発言の中に、「一番大事なところは、文化を伝承していくこと。それは学校教育とはちょっと違って、学校教育でアイヌのことを広げていくことも大事だが、アイヌ文化を継承していくことがとても大事だ。」という内容があった。また、文化の伝承の他にも、アイヌの当事者の仕事創出につなげていく必要があるという趣旨の発言もあった。「仕事の創出」のところで、アイヌの方々が自分たちで仕事をして、それを土台として継承活動につなげていくということが話されていたが、どこに盛り込まれているのか。

つまり、仕事創出の観点で、アイヌ文化を使いながら仕事とか観光につなげていくのは良いが、アイヌの当事者がその仕事に関わらないとアイヌの継承は難しいということで、前回話がまとまっていた。その辺が、番号でいうとどこに反映されているのか。

□事務局

別紙2の5ページ，4-3(8)の部分だ。「旭川出身のデザイナーが手掛けるアパレルブランドとのコラボレーションによる製品開発」ということで，内容としては，アイヌ文様を独自に作り，それをアパレル製品に採り入れて新製品を開発をするというのと，そこである程度デザイナーとの協働ができるということであれば，さらにそこから進んだ内容として，共同開発のグッズを作っていくことだ。アイヌの方に協力いただきながら製品を作り，その中で，例えばデザイナーに売上の何パーセントかをアイヌの方にロイヤリティとして支払いしていただくなどの形での「仕事の創出」ということがある。

もう一つは(12)，「食や家具といった地元の特徴的な産業とのコラボレーション」ということで，まずは，アイヌの方が実際にどういった技術を保有していて，どういうことができるのかを相談させていただきながら整理したうえで，少し先の話にはなるのですが，それを応援していただける企業や教育機関を探していきながら，コラボレーションで新しい製品開発をしていくといったような道筋で考えていきたい。仕事に関することについては，この二つを考えている。

■参加者

デザイン料をアイヌの方々に提供して，この予算の中で払うということか。

□事務局

デザイン料を設定する方法のほか，企業との協議が必要となるが，製品の売上の中から何パーセントかをロイヤリティとする方法などがあり得ると思う。

■参加者

アイヌ文化フェスティバルの開催のところでも，「アイヌ料理をはじめとする料理を提供するコーナー」とあるが，レシピをはじめとして，アイヌの方々が，何処まで人数が入れるか分からないが，作り手に対して，その労力に対する支払いだけではなく，アイヌ料理のレシピ料といった形で支払う仕組みをつくる。年長者への聞き取りの取組に関しての調査段階でも，アイヌの当事者に聞き取りをしてもらい謝金を支払うということもあると思う。アイヌの方々が直接，先輩たちから聞き取りする過程の中で，事業費から謝金を支払う形にして，仕事をしながら学習するという組み立てにできないか。

■参加者

前回の話だと，アイヌ舞踊であったり，そういったものがそのまま仕事になっていくというような話だった。マージンうんぬんよりも，文化を伝承していくその行為が仕事化していくことが重要だと思う。

また，文化の保存に関しても，どんどん高齢化して行って失われていく中で，保存する

べき文化を如何にすくい上げていくかがポイントであって、お金を稼ぐ仕事にしていくに当たり、ここを疎かにしてしまっはいけない。そういった行為に対して、給料といたらいのか、市として保存に如何にお金をかけられるか、というところをもうちょっと重視したほうが良いと思う。

■参加者

アイヌの方々に仕事の創出の機会を作ることによって、それが実は1番目の「アイヌ文化の保存と伝承」につながっていくというようなことが大事になってくる。それがないとアイヌの方々がやってきた継承行動が断ち切れてしまうし、アイヌの方々ではない方がアイヌ文化を発信するということになると価値が下がると、前回話があった。そのことを意識した方が良い。

■参加者

当事者が保存していくことが大切だ。それをどこかに組み込めないか。

■参加者

仕事の創出の方向とか仕事の内容というのが、まだはっきり分からないが、技術の伝承活動の中で培われていくべきだ。ただ、アイヌの伝統的な物作りが商品になるかということ、難しいところだ。手間が掛かりすぎるし、材料となる動植物等の資源が少なくなってきているので、別の方法を考えなければいけないのかもしれない。それは活動をしていく中で、少しずつ見えていくようになれば良いのかと思う。

工芸品の制作や伝承活動に当たり、必要な自然素材をあちこちで探して、それを様々に加工していつているが、必ずしも毎年同じだけの量が採れるわけではない。別紙2の4-1(4)「自然素材の調査・研究・栽培」のところに「体験にも活用」と書いてあるが、それもできるかどうか、はっきりとは分からない。まずは素材を確保して、ストックしていくところからかもしれない。そういった意味でも伝承活動を通じてそれができる人を増やしていくということがとても大事だ。

□事務局

伝承活動ということであれば、現在も取り組んでいるところであり、例えば、嵐山のチセの保存・補修に際した熟練者からの技術の伝承の機会を設けたり、生活館での講習会において、儀式に関することなどの伝承の機会を設けている。

■参加者

昨年度くらいから儀式等に関するものは行われてはいるが、必ずしもそのやり方で良いのかどうかというと、内容に関しては考えるべきところがあるかなと思う。それと生活

館で行っている一般市民向けの刺繍とか文様づくりの講座はあるが、この事業の中で、アイヌ内の伝承活動として行われているものはないと思う。

■参加者

まだ予算が計画に組み込まれていないため、それぞれの事業の適否が分からないところもある。アイヌの方々にどれだけ事業費が入るのかとか、WEBサイトの方の予算が非常に多すぎるといような、事業予算の配分が見えてきた段階でないと何とも言えない。それから、国から求められているためこのような形式だと思いが、それぞれの事業が7年度から11年度まできた時のゴールで何を求めているかをある程度イメージしないと、評価にもつながらない。毎年同じことだけやっていく事業も散見されるが、それで良いのかどうかも分からない。例えば伝承活動、文化の保存を行いつつ、今度はそれをPRにつなげるために、何らかの媒体に載せていくとか、発信ツールに持っていくといような、それぞれの事業の相関関係を考えていかなければならない。

それは難しいから、アイヌの方々と共に、それぞれの事業をどのように持っていきたいかを聞きながら、計画に落とし込んでいくことも必要だと思う。事業をそれぞれつなげてどこまでもっていけるのか、ストーリーがあったほうが評価もしやすいのではないかと思う。かなり事業が多いところで、前回の委員の意見が網羅されている点は評価できるが、基本方針からどのようにゴールに帰着していくのかということがあまり伝わらない内容だ。

□事務局

予算の規模感については今のところ何も見えない。まずは市の中の予算編成作業が始まって、その中で精査される。その後、国の協議があるため、予算の規模感を今の段階ではなかなか示しにくい。内閣府との事前協議が始まれば、ある程度見えてくるかもしれない。

■参加者

「アパレルブランドとのコラボレーション」とあるが、これはブランドを提供して、その売上の数パーセントを得られるという事業なのか。

□事務局

いくつかバリエーションがあり、売上の数パーセントというものや監修費のような形でお支払いするということもあり得る。企業側との協議も必要で、はっきりは決まっていない。

■参加者

その内容だとどれぐらいの収入が見込めるか見えない。

■参加者

それでやったほうが良いのか、模様をいくらいくらで提供するというほうが良いのか分からない。ただ、その模様は何にでも使えるよということになると、ややこしいことになってしまう。商品を開発するのは良いが、出来上がったものをアイヌ側で買上げし、在庫を抱えてしまうということになると支障がある。

ブランドの影響力がすごく大きいのであれば良いが、さほどでもないのであれば、ちょっと難しいのではないかと思う。いずれにせよ、企業側との協議でこういう風になったからやってくださいと依頼されても困ることもあると思う。

□事務局

観光課の担当事業になるが、予算化なり事業を実施するにあたっては、アイヌの方ともコミュニケーションをしっかりと取りながらやっていくことになるだろう。

□事務局

旭川市の事務局の立場として、仕事の創出のところで考えたいのは、アイヌの方たちと産業を結び付ける仕組みをこの交付金を活用してつくっていききたい。今、アイヌの交付金ありきの話でいろいろな事業を展開しているが、もし交付金が無くなってきたときに、旭川市担当でどれだけ事業を展開できていくかということ、将来的に「もう、ない」という可能性もある。保存・伝承活動に事業費を支払うという形での仕事のみだと、それが途切れたときに仕事が無くなってしまう。そうではなくて、行政から離れたところでもある程度成り立っていく仕組みづくりをしたい。ということで、産業とマッチングするような案を挙げている。

■参加者

例えば、文化保存のための研究費という形でずっとお金が使える訳ではなく、別のところで稼げる何かをつくって、文化保存に流用していくという考えか。

□事務局

新しくチャレンジする際のリスクヘッジとして交付金を使ってやっていく。今までやってきたことを継続してそのままやっていくということではなく、新規要素を入れたり、リスクを取って何か新しいことをやったりという部分で、交付金を活用していくのが本来の趣旨だ。

■参加者

チャレンジの結果として、何を失敗とするか。普通は数値目標が達成できなければ失敗となるが、数値で表しきれない部分もあり、なかなか判断が難しそうだ。

生活館のアイヌ文化フェスティバルは毎年開催となっているが、そうなのか。

□事務局

取りあえず毎年で記載しているが、2～3年に1回ということにもできる。

■参加者

別紙3の第2期、⑥市民の主体的活動の促進の中で「アイヌ料理の創出」については、地域計画の何ページになるか。

□事務局

別紙2の4ページ、4-2(9)「旭川独自のアイヌ料理の創出」だ。

■参加者

「市民の主体的活動の促進」とは、どのように市民が参加するのか。飲食業界が参入してくるということか。飲食業界も含めて市民がアイヌ文化に関しての接点を作っていくということ、広く市民参加といっているのか。

□事務局

そう。旭川独自のアイヌ料理とは何かというところで、例えばこういう素材を使うとか、特徴的な調理過程を整理して、その要件を満たした料理を認証して周知していくというイメージだ。

■参加者

「アイヌ料理」という風になるのかは分からないが、何らかの形でやれたら良い。

■参加者

「アイヌ料理の創出」はアイヌの方がレシピを提供して、そこに参画していくということか。

□事務局

そういうイメージではない。アイヌ料理たり得る要件を設定して、それをクリアしたものを「ASAHIKAWA AINU FOOD」のような呼称で認定していくということだ。

■参加者

この事業も、これから中身を検討していくということか。前回会議の発言の趣旨はこれとはちょっと違って、アイヌの中でお弁当屋さんをやっている人がいるので、アイヌ自身で調理に携わっている人が新しいレシピなりを開発できるように、そういったところに予算を付けてもらえないかと思って、意見を出した。

□事務局

開発支援ということになると、どのように関わっていくのか難しい。お弁当を売るとなると、公共目的というより個別のビジネス支援になるので難しい。

■参加者

ビジネスとは切り離して、例えば食べマルシェや冬まつりのときなどに、旭川のアイヌが自分たちの作ったレシピだよということで出すイメージだ。

□事務局

アイヌ料理の提供の場としては、アイヌ文化ふれあい祭りでの提供や、アイヌ文化フェスティバルでの機会を、他の事業の中に入れていく。

■参加者

それは既存のアイヌ料理を提供する場として、ということか。食べマルシェでは特別のスペースを設けるとのことか。

□事務局

これはまだ、食べマルシェ担当との協議が詰め切れていない。

■参加者

今はお茶だけになったが、実は食べマルシェの会場で試食を提供していたことがある。予算がかなり低かったし、調理や運搬がかなり大変だった。私自身、個人的にポットを何個も買ったりした。無理にこれを事業化しなくて良いが、ある程度まとまった予算を出すからやってくれということであれば、誰かに一任することは検討可能だ。

事業として経費を負担して、無料で試食を提供するのか、売上でやりくりするのかで全然違う。

□事務局

試食は市の事業のなかでやっていたか。

■参加者

そうだ。博物館主催で「アイヌ文化ふれあいまつり」を実施していて、今お茶やハスカップジュースの提供をしているが、食べマルシェに関わるため、食に関するものでないとそこで扱えないということで、会場内ではなく、隣接するアッシュを会場としていた。おつゆも作って提供していたこともある。ただ、予算的に厳しく、おつゆは無くなった。

□オブザーバー

以前はアッシュで、食べマルシェの時期に合わせて博物館主催の「アイヌ文化ふれあいまつり」の中で、アイヌの方々に協力いただき色々な試食のコーナーを設けていた。コロナ禍で食べマルシェの近くの会場でやるのは止めて、去年から博物館の中で「アイヌ文化ふれあいまつり」を開催している。

今回の事業案では、食べマルシェの会場の中での試食ではなく、販売できるようなことも考えられないのかなと思ってはいた。担当課との協議ができておらず、詰め切れていないため、今後相談できればと思っている。

■参加者

別紙1の⑧にあるガイドの育成についてだが、アイヌ文化にリスペクトというか興味を持っている一般市民の中から、ガイドとは言わないまでも、アイヌの応援隊みたいにしていくことが必要かなと思う。そういう意味で、アイヌ記念館、動物園、博物館を巡るツアーを観光の入り口として作ってもらいたい。そこにアイヌの方々がお仕事として入って、アイヌ文化について興味を持ってくれる市民が「アイヌ記念館友の会」みたいな形で参画する。一般市民や企業に対する発信だけでなく、コアなアイヌ文化に関わる方々を育てるという構想も入れてもらいたい。

ただ、アイヌの方々が中心になって説明することに価値があるということであり、それに対してのうまい具合のやり方は、アイヌの方々にアイデアを出してもらいながら考えていく必要がある。広く市民に告知すると、コアなパワーを作ってアイヌ記念館を拠点として発信できるようなネットワークを作ることが重要だ。

□事務局

ガイドについては、安定した仕事としていくという部分で、人材確保がなかなか難しい部分もあると思う。ファンを作るという意味では、動物園と博物館と連携したツアーでアイヌ文化に触れていただいて、ファンになってもらうということもあるのかなと思う。また、別紙2の4-3(11)にあるが、「観光関係者によるアイヌ文化関連の情報発信の促進」で言えば、例えばホテルの方がアイヌ文化の情報を学びにアイヌ記念館に来ていただくとか、そういったことも可能かなと思う。

■参加者

市民を対象にしたツアーを実施したらどうかということか。

■参加者

市民向けというよりは、どちらかという観光者向けと書いてある。

■参加者

二本立てだと思って、観光関係者が、何処に行ったら何があるか分からないこともあるので、例えば、ホテルでお客さんがロビーのスタッフに何処に行ったらどんなものがあるかと質問したときに、「アイヌ記念館に行ったらこんな体験ができますよ。」という情報を提供できるようにしてもらえるとありがたいと思う。博物館、動物園、記念館について、ホテル関係者とか、タクシーのドライバーさんとか、その他に駅にある観光情報コーナーとか、そういったところの人に一通り知ってもらいたい。そういう意味ではこれは一般市民のファンを増やすという内容ではない。

様々なイベントがあるときに、市民対象に何か特典を付けるような情報発信をするのはどうか。例えば、冬まつり会場でアイヌの文化を発表する機会があるとしたら、市民対象に何か情報発信するとか。生活館でのフェスティバルは市民対象なので、周知の際に、先着申込に特典を付けてお知らせするというようなこともあるかと思う。

ツアーも良いと思う。神居古潭のツアーは難所も多く難しいが、できたら良い。

■参加者

地元の観光ということで具体例を挙げると、ココ企画という企業があり「モトクラシー」というフリーペーパーを発刊している。こういうツアーを組みたいと言えば、たぶんアイデアは出してくれると思う。活用できる会社に積極的に参画してもらいツアーを作っていく方が、確実なものができるのではないか。

■参加者

「アイヌ記念館友の会」でツアーをやった時には旭川まるうんトラベルの方々が見学に来ていた。観光客向けになるとショートステイになってしまい、3時間以上になるとちょっと長いという声があったが、アイヌの方々はもうちょっと長く見せたいと思っている。

■参加者

いや、長くなくても大丈夫かな。神居古潭のツアーは下準備が必要になってくる。博物館でも神居古潭のガイドをしているが、どこまで実際に見られるかという問題が出てきてしまって、例えば「伝説の岩」を見るにはかなり困難だ。そこまで全部整備ができれば、それは素晴らしいが、整備するのが大変だから船・ラフティングで行くという方向性もある

る。草刈りをして整備して降りて行けるようにしても、川なので危険が伴う。そこをどうするか。「伝説の岩」の見せ方は結構難しいと思う。

□オブザーバー

行きづらい場所は二つあったが、「魔人の頭」は大丈夫だ。「魔人の足跡」は以前、開発建設部に依頼してキャットウォークを作ろうかという話もあったが、条件が折り合わず断念したことがあった。

■参加者

実際そこに降りて行けるようにしてしまったら、どなたでも行けるようになると、川のすぐ目の前の岩なので非常に危ない。誰かガイドが付いていかないとツアーはできない。アイヌでも、みんな見に行っていないので、ツアーを1回やってほしい。

次第4 「令和7年度の実施事項について」

□事務局

別紙2を基に説明

■参加者

令和7年度の事業がすごく多い。予算を当てるために、「やります」という姿勢を見せなくてはいけないが、初年度から「大変だ」となるかもしれない。尻すぼみにならないように、うまくバランスを取ってほしい。

質問だが、年度ごとにPDCAを行い、確認することを求められているのか。各事業年度の終了後に、成果や反省点を洗い出し、次年度盛り込むというような形で検討していくのか。

□事務局

そうだ。この検討委員会を継続開催する中で行っていくことを想定している。交付金の手続きの関連では、毎年度、内閣府に対し、計画・目標に対する報告を行うこととなる。また、一つの節目として、中間報告の機会があり、3年目が終わった段階で一度公表することになっており、各事業がどれだけ進捗してきていて、今後どうするのかを報告・公表する。財務省から内閣府に対してPDCAの在り方に関する指摘もあって、詳細が変わってくることもあるかもしれないが、概ねそういう形で継続になると思う。次回開催までには内閣府の方針が説明されるので、大枠は共有できると思う。

■参加者

申請したら、だいたい採択されるのか。はねられることもあるのか。

□事務局

全部がはねられることはないと思うが、見直しを求められるものも出てくるかもしれない。

■参加者

市の予算化は難しいのかもしれないが、例えば学校に出向くアイヌ音楽会とか、アイヌ文化ふれあいまつりとか、アイヌ文化に親しむ日とか、アイヌが直接関わる事業の予算をもう少し増やしていただきたい。1回当たりの謝金の単価を増やしてほしい。アイヌ民族文化財団の国内文化交流事業が事業数としてはたぶん一番多いのだが、この謝金が1回当たり1万円にはなっているので、最低このくらいにはしてほしい。トータルの予算が決まっているのであれば、回数を減らすか。回数が同じなら予算を増やすかの対応をしていただきたい。

□オブザーバー

博物館の事業については検討する。

■参加者

嵐山の整備とか、アイヌ文化に関わる施設整備は今回盛り込まないのか。チセの整備はあるが、チセに行くまでの間の掲示物とか。嵐山の存在を知らせるきっかけとなる掲示物などはないのか。

□オブザーバー

掲示物は既に乱立しており、整理が難しい。

■参加者

嵐山を補修するなら、手すりやぼこぼこになっているコンクリートを整備したほうが良い。

■参加者

アイヌ向けに巨木を見るツアーを実施してもらいたい。アイヌの伝承を含めて、冬にしかできないイチイカツラを見るツアーをやってほしい。スノーシューを履かないと行けないようなところなので、ガイドが必要だ。

■参加者

川村カ子トアイヌ記念館の案内標識をあまり見ない。国道に2か所くらいしかないと思う。増やしたらどうか。

次第5 「その他」

■参加者

付け加えたい事業がある。TBSの映像制作会社から、旭川のアイヌについて記録した古いニュース映像等を使用した動画制作の企画の提案があった。この提案内容の実施を検討してほしい。

今回の計画案の中に、マンガ家とのコラボレーションという要素もあるようだが、イブニングという雑誌に掲載されていた「エシカルンテ」というアイヌに関連する漫画作品もある。作者である森和美さんの実家は旭川で、私たちとも関わりがあったが、連載は長く続かなかった。予算を付けて何か連載ができるようなことができないかと思う。

以上